

甲斐市立敷島北小学校 自己評価書

平成31年 2月 1日 作成

校長 平塚 克人

記述者 職名(教頭) 松井 渉

学校教育目標 「ともに学び ともに生きる 心豊かな子どもの育成」

- 知育 ・よく学び、よく考える子ども (自分の考えを持って)
- 徳育 ・思いやりのある子ども (相手の立場を考えて)
- 体育 ・健康でたくましい子ども (生活の中に運動習慣を)

学校経営方針

※基本：教師個々の資質・能力の向上と連帯と信頼による組織力の発揮

- 1 全職員が常に学校目標を意識するとともに、めざす「子ども像」「学校像」「教師像」を念頭に置き、その具現化に向けた教育実践に取り組む。
- 2 明確なビジョンを持ち、目標に向かって確実な取り組みを展開する。
- 3 PDCAサイクルを生かし、課題を明らかにして大胆な工夫や改善をしながら、より質の高い教育活動を構築する。
- 4 意欲的に研修・研究に取り組む、専門職としての資質能力の向上に努める。
- 5 特色ある学校づくり、信頼される学校づくりの実践に努める。

1 全体評価

保護者へのアンケートを含む自己評価の概要は次のようにまとめることができる。

- ・ 本年度の学校経営方針に基づき、教育目標の実現に向けて具体的な方針と取り組みについて提案し、一人一人の教職員がそれぞれの職務を遂行してきたことにより本校の総合評価は概ね良好な水準にあると考えられる。
- ・ それぞれの学年経営方針に基づいた適切な学年教育目標が設定され、その実現に向けて、適切な学年・学級経営が行われていると考えられる。
- ・ 学習指導については、概ね肯定的な評価が多く、児童の様子を把握しながら基礎・基本の定着を図る授業を行っている様子が見えてくる。評価を意識した授業や、質問や発言が出てくる授業づくりなどについては、さらに改善することができると判断している傾向がある。外国語活動の指導については、教科化の実施が近づいてきており、さらに研修を深めていくことが必要である。
- ・ 生徒指導については、全体的に肯定的な評価になっている。キャリア教育については教育課程に位置づけてから数年が経過してきているが、その内容をきちんと踏まえた上で教科指導や生活指導を行っていくことが必要である。問題行動の早期発見・早期対応を心がけて日々児童の指導にあたっているが、日頃からさらにアンテナを高くし、児童の良き相談者たるべき姿勢をもち続けていきたい。
- ・ 本校のPTA活動や地域との連携について肯定的な評価が多く、学校側からも情報を発信し、保護者も協力的であるという良好な関係ができているといえる。さまざまな場面で地域の方々にご協力いただいて貴重な体験をさせていただいているが、さらに内容を検討したり教材開発をしたりすることを日頃から心がけていきたい。保護者からの要望等の情報収集については、これからも受け身のみにならないような工夫が必要である。
- ・ あいさつや読書活動について児童会や委員会が中心となり取り組みを進めて定着してきている。体力向上への取り組みは、スーパー北小タイムで行ったたてわり遊びやなわとびなどの活動が全校に広がり、主体的に体を動かしている児童が多く見られるが、教職員自身の指導という視点から見ると、その取り組み方にはまだ向上の余地があるという結果である。

2 項目ごとの評価結果(達成状況・改善策)

I 学校教育目標に関して・学校経営について

II 学校運営について

- | | |
|---|---|
| 達 | ・ 学校長から学校教育目標の提案が行われた。本校の実態を踏まえた上での提案で、校長の経営方針の下、一人一人が新たな気持ちで教育活動を行ってきた。 |
| 成 | ・ 新しい校務分掌でスタートした1学期は、学校運営上自分の分掌がどのように機能しているか確かめながら行ってきたため、それぞれの役割が不明確な部分も見られたが、情報交換を密に行い、それぞれ |

状 況	<p>の分掌を計画に沿って実施することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 職員数が年々減り、複数の校務分掌を受け持つなど、多忙化に拍車がかかる中、全体的には、意識を高くもって取り組んだ様子が表れている。 学級担任と非常勤講師・市支援員とが協力し合い児童の実態に応じた個の指導を丁寧に行っている。
改 善 策	<ul style="list-style-type: none"> 全ての学級が単級であるために、学級担任の役割や校務分掌の負担が大きくなるとともに、他の教職員との連携や意見交換等がなかなか持ちにくい状況もある。児童の指導に担任だけに関わるのではなく、全教職員で敷島北小の子ども達を育てていることを教職員一人一人が常に意識し報告・連絡・相談・確認をお互いに率先して行いながら、共通理解のもとで、教職員集団として児童の指導にあたり、よりよい学校運営を目指していく。
Ⅲ 学習指導について（児童用アンケートの結果も含めて）	
達 成 状 況	<ul style="list-style-type: none"> 教職員が意識を高く持って、特別支援教育や家庭との連携に積極的に取り組んでいることがうかがえる。 学習指導については、校内研究や自主的な研修会を通しての指導方法の向上を図り、日々の授業に生かせるように取り組んでいる。しかし、児童アンケートの結果、「授業で分からないことがあったら先生に聞く」の項目は以前から本校児童の課題であったが今回はA評価の割合が市の平均を上回った。引き続き自分の考えをしっかりと話すことができ、分からないことをそのままにしておかない児童の育成を図っていく。
改 善 策	<ul style="list-style-type: none"> 本校児童は、学校生活全般において、積極性に欠けると言われてきた中で、授業を中心に学校生活全体で、児童の表現力の育成を目指して取り組んできた。また、様々な場面で自主的に判断し、行動する力も培ってきた。児童の変容を期待して、これらの取組を継続していく。 本年度も学校全体で「家庭学習」の定着を目指す取組を推進した。引き続き、職員間の共通理解を図り、学年の目安として、10分×学年+10分の家庭学習の時間を設定し「家庭学習の手引き」を全児童・全世帯へ配布した。今後も更に家庭と連携を深め、指導を継続し、この項目の結果を見守っていく。定着を図るために、内容や家庭への発信方法の工夫、児童への評価も含めて検討する必要がある。
Ⅳ 生徒指導について（児童用アンケート結果も含めて）	
達 成 状 況	<ul style="list-style-type: none"> 教師の自己評価の IV 2 「規範意識をはぐくむ指導をしている」 の項目は市と比較すると北小は低くなっている。 IV 4 「問題行動の早期発見・早期対応ができています」 の項目は、昨年度より、A評価が減っている。 自信をもって取り組めるように組織的な対応をしていくことが今以上に必要である。 児童の行動や状況で問題な点や気がかりなこと等については、定例の職員会議で共有化を図っている。 生き方教育（キャリア教育）については、C・D評価はないものの、A評価の割合が市と比較して低く、内容をきちんと踏まえたうえで教科指導や生活指導を行っていく必要がある。 自己評価から、地域との連携については肯定的な評価が多いが、家庭との連携については課題と捉えている部分もある。
改 善 策	<ul style="list-style-type: none"> 「規範意識を育む指導」「問題行動の早期発見・早期対応」については、引き続き職員間の共通理解を図りながら、全校体制で粘り強く取り組んでいく。 キャリア教育については、これからも、教育課程に位置づけられた全体計画を意識し、学年ごとの年間指導計画に応じ、昨年度までに、成果を上げた防災教育に関連させながら、学校教育全体で行われるようにしたい。 家庭や関係機関との連携がより図られるよう、情報の共有化とスピード化を意識しながら生徒指導部会や特別支援教育校内委員会等で組織的に対応していく。
Ⅴ 地域との連携について	
達 成 状 況	<ul style="list-style-type: none"> 教師の自己評価のすべての項目で、昨年度よりA評価の割合が減り、教員一人一人が積極的な情報収集をしようとする姿勢や児童の安全確保に努めていることが分かるが、十分ではないと感じている。

改善策	<ul style="list-style-type: none"> 校務分掌や立場の違いで、保護者や地域からの要望や情報の収集の仕方も変わってくるので、学年部会や家庭訪問、個別懇談等あらゆる機会を利用し、情報を発信するだけでなく、PTA委員会、学年PTA総会や地区懇談会などを利用して、保護者や地域の意見を聞くことにも力を注ぎたい。 学校だよりや学年だより、ホームページを使って、これまでどおり学校の教育活動を地域や保護者に知らせていく。必要に応じて、各地区の自治会の協力を得ながら、回覧板も活用したい。また、これからも、ホームページにタイムリーな話題を載せるよう努める。親しみをもてるように内容、画像等をさらに工夫するとともに、担当だけに負担がかからないように、全職員で題材の提供や取材の協力を行っていく。
VI 学校の特色に関して （児童用アンケート結果も含めて）	
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> 約84%の児童が「読書が好き」と答えているが、読書量・質に個人差が見られる。「まったく読まない」と回答した児童が約8%もいることは課題である。 児童アンケートの 18「地域の人と出会ったらあいさつをしているか」 では、肯定的な評価が9割に達している。学校では、あいさつ運動に取り組んできているが、積極的に言える子とそうでない子との差が出てきているのも事実である。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> 読書に関しては、引き続き、図書だより等で保護者に対しての情報や意識改革のための資料提供を行う。特に、夏季休業中に「親子読書」等の取組を継続していく。 あいさつに関しては、防犯パトロール隊や地区懇談会等、地区や保護者対象の会議の折に「声かけ・あいさつ運動」の推進をお願いしてきている。引き続き、あいさつ・声かけ等を地域・保護者と共に協力して行っていく。 児童会の「あいさつ運動」と連携して継続して指導し、登下校時にも挨拶する習慣をつけていく。
<h3>3 まとめ</h3> <p>〈成果〉</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 本年度も「家庭学習の手引き」を家庭へ配付し、家庭での支援をお願いしたことで、約85%の児童は宿題を忘れずにしていると答えている。学年の目標時間の勉強については、いつもしているのは約38%であるものの昨年度より若干減少している。「だいたいしている」まで加えた肯定的な児童は約75%になる。「家庭学習の手引き」の取組を定着させることと、「宿題をしていない」と回答した児童について、両極化が進んでいることに留意しながら、家庭と連携し、継続的な個別対応する中で、学力の向上を目指す必要がある。 ② 本年度は、校内研究の主題に『豊かな心をもち、主体的に学ぶ子どもの育成』を掲げ取り組んできた。その取組の中で、「授業中に質問や意見を言っている」の項目でA評価の児童は増え、「授業（勉強）でわからないことがあったら先生に聞ける」で、市全体よりもA評価が上回っている。今後も、これまで取り組んできた「豊かな表現力の育成」の指導に引き続き取り組んでいく。また、授業実践の中から成果と課題が見えてきたので来年度の研究課題として研究を深めていく。次期学習指導要領の中で取り上げられている「主体的・対話的で深い学び」のできる児童の育成を目指して授業改善を行っていく。また「豊かな表現力の育成」についても引き続き取り組んでいく。 ③ 現段階では、不登校傾向の児童が数人いるので、きめ細かな生徒指導を行い、「楽しい学校づくり」を推進していく。特に「クラス（学年）に仲良く遊ぶ友達がいない」「困ったときに相談できる友だちがいない」と回答した児童が少数ながら存在することから、日々の観察から得た情報とともに「Q-U検査」等の結果も参考にしながら学級経営をしていく。「Q-U検査」等の結果から、個別面談（児童）を実施して一人一人の児童の気持ちや人間関係などを担任が把握する。クラスの中でお互いを認め合い、励まし合える仲間づくりを進め、居心地のいいクラスで学校生活を送れるようにする。 	

〈課 題〉

- ・ 来年度に向けて、今回、自己評価の低かった項目、特に、「規範意識をはぐくむ指導」「生き方教育を児童の実態に応じて行う」「問題行動の早期発見・早期対応」「地域の教育力を活かす指導」について、問題意識・教育専門職としての自負を持ち、学校組織として年間を通した取組を行っていく。